

いきいき

VOL. 33

平成23年 1月17日

いわき市総合教センター

■発達障害について（2）

今回は、ADHD児への対応について、ご紹介します。

1 注意欠陥多動性障害（ADHD）とは

注意欠陥多動性障害（AD/HD：Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder）は、ADHDと表記されることもあります。注意持続の欠如もしくは、その子どもの年齢や発達レベルに見合わない多動性や衝動性、あるいはその両方が特徴です。この3つの症状は通常7歳以前にあらわれます。

- （1） **多動性**（おしゃべりが止まらなかったり、待つことが苦手でうろうろしてしまったりする）
- （2） **注意力散漫**（うっかりして同じ間違いを繰り返してしまうことがある）
- （3） **衝動性**（約束や決まり事を守れないことや、せっかちでいらいらしてしまうことがよくある）

一般的に多動や不注意といった様子が目立つのは学齢期ですが、思春期以降はこういった症状が目立たなくなるともいわれています。

2 ADHD（注意欠陥多動性障害）への対応

（1）支援の基本

つまずきの本質を周囲の人たちがきちんと理解して、子どもが自分自身の潜在的な力を活用していけるように、手をさしのべていくことが大切です。

刺激の調節、集中時間への配慮、得意な認知処理の活用、行動のコントロールや振り返りのための工夫など、こうした支援が子ども個人の状態にあわせて適切に実施されれば、彼らの行動は大きく改善していくといわれています。

しかし、反対に、周囲の人からの理解が得られずに不適切な対応を受け続けると、自己評価や自尊感情が低下し、二次的な問題につながることもあります。（例えば、かんしゃくを起こすなど）。

このような二次的な問題への適切な対応が遅れると、その後の困難がさらに大きなものとなる場合があります。つまり、できるだけ早い時期からの適切な対応が重要となります。



（2）具体的な対応例

環境面	○ 教室での机の位置や掲示物などを工夫して本人が少しでも集中しやすくなる方法を考えます。（教室前面の掲示を最小限に、席を前にする等）
	○ 勉強や作業を10分～15分など集中できそうな最小単位の時間に区切って行わせます。（授業に変化をつける、問題文を区切って提示する等）
行動面	○ 子どもの行動のうち、好ましい行動に報酬（褒める）を与え、減らしたい行動に対しては過剰な叱責をやめ、報酬を与えない（約束事としての無視など）ことで好ましい行動を増やそうという試みを行います。
	○ 問題行動を抑制できたことやその頻度が減ることなどにも注目して、しっかりと褒めてあげることが重要です。
	○ 報酬を得点化（シール）して一定数になったら何らかの特別なご褒美・行事への参加（映画・博物館に行くなど）につなげる方法もあります。
薬物療法	○ 専門医療機関でのみ処方が可能です。